

## 稻荷信仰と狐の民俗

吉川正倫

### 1、稻荷をイナリと訓む所以は

山城国風土記逸文によると「伊奈利イナリの社、伊奈利と称イうは、秦中家忌寸イミキ等が遠祖、伊呂具秦公、稻梁イネを積みて富裕を保てり。仍カれ餅イクハを的トとなししかば、白鳥ハクニに化カ成ナりて、飛び翔カケりて山の峯ミネに居り、伊禰奈利イネナリ生オひき。遂スに社の名ナと為ナす。その苗裔ハツコに至りて、先の過アヤマチを悔クいて、社の木ネコジを抜にして家に殖ウゑて禱イり祭りき。今、其の木を殖ウゑて、蘇オヒツがば福フクを得、枯カれば福フクあらじとす」<sup>(1)</sup>とある。

稻荷(いなり)は「稻成り生ひき」から出たという説の論拠であり、稻の神を表わすのに些かの不自然も感じないが、この「いなり」に「稻成」とか「稻生」という字を宛オてずに「稻荷」を以て宛オてた理由は何であつたろうか。嘗て笹谷良造氏は「穀霊を古く稻瓊ニと云つた所から、稻荷と宛オてたが、そのにがりニと訛オつたものである」<sup>(2)</sup>とされたが、瓊ニを荷としたのは単なる宛字であつたのだろうか。

折口信夫氏は、古代研究・民俗学篇の大嘗家の研究の中で「にへまつり」の「にへ」は「神又は天皇陛下の召し上り物、といふ事である。調理した食物の事をいふので『いけにへ』とはちがふ。生贄いけにへとは生なまのまま置いて、何時でも奉る事の出来る様に、生けてある贄の事である。動物、植物を通じていふ」と説いておられる。折口説は実証というよりも古典の深い読みを背景に古代人の心に迫ろうとされる詩人的洞察からくるものであるだけに注意せよとの所論もあるが、この贄に対する所見は正論と思われる。つまり、稻荷を稻生いなりとしてみるならば、稻を調理しないで生なまのまま生いけてある「稻の生贄」ということにならう。

稻の贄を、更に稻荷と表現するに当って、神宮の拔穂祭ぬいほのことが想起される。

桜井勝之進氏によれば<sup>(3)</sup>この祭は「明治の初めまで伝えられた古儀であり、秋の稔りを謝する神嘗祭(当時は九月の十六日)の未明に、大物おおもの

稻荷信仰と狐の民俗

忌父いみのちちが御常供田で作った稲を抜穂にして、神宮のご正殿の下に置き奉る行事であり、大物忌父は外宮の御常供田でとれた稲の穂のところだけを抜いて束ね、棒の前後にかけたものを肩にかついでご正殿の御床下まで運んだのである。」とされ「各地の神宮付属の農民から貢納する米は、懸税かけちからの稲といって、刈りとったままの穂を束ねて、内宮と外宮に当日持参し、これを玉垣にかけならべて捧げたのである」としておられる。何れの場合も、行列の先頭に禰宜のさきが太玉串を持ち、警蹕けいひつを唱えつつ、その先導をしたものだそうである。

これを一般には、荷前のさきといっている。即ち諸国より到る貢物の荷の前を神に献るために初物にとり分けたものをいうのであるが、一説には、登前のりさきで、稲の稔のりの初穂だともいう。

しかも抜穂祭の行列は、禰宜が警蹕をしながら進み、その後方を大物忌父が初稲穂を担いで進む有様を思う時、警蹕とは、神や天皇の出御に当って、その御先を追う作法である故に、単に稲の初物を捧げるといふよりも、稲の穀霊を神前にもたらすもの、否、神霊の依代よひしろそのものを捧げる作法であったといえるのではないか、神宮に今日は伝わっていない作法である由であるが。

以上をまとめてみれば、稲荷とは形は稲の荷前のさきであろうが、実は稲の瓊にであり、また生贄いけにへであって、神の依代としての稲を何時も生かし続ける稲生いけにへの意であり、これが稲荷の文字を用いつつ「イナナリ」「イナリ」と訓ませる所以でなからうか。

## 2、稲荷信仰に狐が伴なう所以

日本中、随所に祀られている稲荷神社の特色は朱塗の鳥居に狐の像とされる位に、狐と稲荷とはつきもので、狐が好物であるという伝承からか、油揚の入ったうどんや丼は狐うどん、狐丼と呼んだり、はては油揚にくるんだおすしを「稲荷ずし」等と呼ぶ位である。

お稲荷さんのお使いに狐が用いられた理由として、一般には京都伏見の稲荷大社の御祭神に狐神が祀られているからだともいわれている。

先述の山城国風土記逸文に見られるように古くは稲荷神一神であったものが、中古に三座となったようである。二十二社註式によれば平安朝には「稲荷下社ハ大宮女命、中社ハ倉稲魂命、上社ハ猿田彦神」とあって、現在ご祭神は、宇迦之御魂大神、佐田彦大神、大宮能売大神の三座となっている。

別に、摂社として大己貴神を祀る田中社及び四大神として五十猛命、大屋姐命、狐津姫命、事八十神を加えて五座ともされている。

何れにも狐神はまつられていないようであるが、命婦、阿古町、黒尾、尾薄等の名を付して狐神ありとの俗信がある。祭神と神の使いとが混同された結果からかと思われる。

直接狐との関係はないようであるが、平安朝に稲荷大社が東寺と結んで発展した歴史を思えば、真言密教や陰陽道の影響下において、狐霊を利しての加持祈禱が行われたことが狐信仰を発展させたものであろう。

しかし民俗学的には撰社の田中社が問題ではなかったかと思われる。

昭和二十三（一九四八）年十二月の「民間伝承」に柳田国男氏が「狐塚の話」というのを載せられた。先生は田社タケシロの問題を考えながら「稲荷さんの由来という点にはたと打当てしまった。伏見の御本社に田中という社が古くからあるのと、今も全国の隅々に稲荷を屋敷神とする風が広く行渡っていることと、二つはどういう風に関連して居るのか、その小さな数十万の稲荷社に於て、特に狐という獣を重要視し、時としては是を神実の如く信ずる者さへ多くなっているのは、どういう事情に基くものか」とされ「諸国の狐神信仰が、伏見を起点として、しかも段々変化したか。はた又大小全く異なるものが、後少しづつ互の連絡をとるに至ったか。或はまた古く共通の信仰の表現であったものが、世を経て一方は特に大いなる成長を遂げ、他の多数のものは別箇の途を歩んだものか。三者必ずいづれかの一つでなければならぬのだが、それがまだ決し得られない」として稲荷様と狐神との関係について思案をされた末に狐塚について問題提起をされたのである。

柳田先生の調査では、狐が居ないと言われる佐渡ヶ島と四国を除いて、北は秋田から南は九州の南端まで狐塚という地名が二百以上あり、それらは単なる当字でなくて、かつてはその名の塚があって地名となったと推測されている。

狐塚と呼ばれたものが古墳であって、実際に遺物の出た和歌山県の岩橋千塚のような例もあり、また狐の姿は見なくても野獣の事を防止するために狐塚の供養をするところもある。また、大和の「カンセンギョ」で知られる寒施行のように、狐塚を特定しないで、狐の出そうな所へ、寒中に油揚げを置いて歩く例が、近畿地方から中国筋にかけて可成り広く行われている。

あるいは大阪の能勢町天王を始め、丹波にかけて、小正月の行事として「狐狩り」を行なう所もある。子ども組の子が藁で作った狐を青竹の先につけて村中の家々を歴訪しながら唱え言をする。

「われは何をするぞいやイ。狐狩りをするぞいやイ。狐のすしを七桶つけて、七桶ながら、エイエイパッサリコ。貧乏狐追い出せ。福狐追い

こめ」

この唱え言は年頭の田作りの予祝の行事であり害獣防除に併せて、疫病退散を願うものだが「貧乏狐追い出せ、福狐追いこめ」とは前述の山城国風土記逸文にいう「社の木を家に植えて繁れば福、枯れば不幸」という話と思ひ併せ、一家の繁栄を狐により祈願しようとの心が示されている。

狐塚もこうした田の神祭りとして深く関わってまつられたものではないかというのが柳田先生の説である。

即ち「狐塚の地形、仮りに塚の跡はもう不明になって居ても、現在その名で呼ばれる所が山か平野か田の中かを明かにしたい。僅かな例だが私の知って居るのは、周開または半面が稲田に接して、田植蒔取の作業を目の前に見られるような小高い所ときまっているように思う。(中略) 実自分などは狐塚を、もとは田の神の祭場だったろうと思つて居る。従つて是がもし谷の陰や原の奥などの、ねっから田に縁の無い所に幾らもあると分ると、忽ちこの仮定はひっくりかへるのである。」と非常に慎重に論を進められたのであるが、その後全国各地から寄せられる報告は、柳田氏の推定を裏づけるものが多く、今や、狐塚は田の神の祭場跡であったというのが学界では定説になっているといつて良いであろう。

朝廷の式典の中でも豊作を祈る二月の祈年祭と、十一月の下旬の新嘗祭とは重要な祭であるが、全国的に、正月、田植前後、稲刈り前後の祭りは田の神の祭りとして大切に祀られてきた。

二月に山の神が田に降りて田の神となり、十月または十一月の秋が終ると田の神が山に登つて山の神となるという伝承は全国的に流布している。

その中でも特定の場所を祭の場と定めて、田の神に祈願をこめたり、感謝をしたりする中に、平素、みだりがましく立ち入らせない聖なる場所としての特定の塚とか田とかがあったと思われる。

稻荷神社史料(五)によれば、備後国御調郡杭庄(クイノシヨウ)は中古以来の伏見稻荷神社の社領であり、杭稻荷という社をこの庄八ヶ村が合同で祭りをしていた。

三重県志摩郡磯部の大御田の式には約五〇捆の青竹が田にねかせてあつて、祭りが終ると若者が七、八〇名、田の中に裸で飛込んで青竹の奪い合いをし、やがて棉のように砕けた竹を各自が分けどりして、船にまつたという。この竹とか杭とかは嘗て田の神を祀る依代であつたらう

と柳田先生は説いておられるが、こうした祭の場に狐塚という名が与えられたとすれば、いくつかの理由が考えられる。

一つには、狐は現在よりも山野に多く住んでいたと思うが、他の獣物と若干異なる所があり、秋から冬にかけて人里へ降りて食物をあさるが、春になると里人の前から姿を消すという。これが、春、田の神は里へ降り、冬、山にこもりて山の神となる信仰に裏うちされて、目に見えぬ神の先ぶれとして考えられたのではないかということである。

十二月に刈りじまいで田の神を祀る能登にアエノコトという儀礼があるが、馬をひいてゆき、馬の耳が動くのを確認して神の降臨があったとして家にお迎えする例があることも知られるように、神の先ぶれと見たのであろう。

更には、空が晴れているのに雨の降ることを狐の嫁入というように、人を化かすとか、狐火等のように村内に好いことのある前ぶれにキツネのタイマツが現れるところが秋田にあるが、不可思議な靈力をもつ狐という発想から、塚の神聖を意義づけるため、狐の有無にかかわらず狐塚の名が出来たともいえよう。

要するに田の神と狐とは、全国的に可なり古くから結びついてきたものであったが、中古、伏見稲荷に田中社が撰社として祀られた時、全国の田中の社と狐の伝承が、そのまま稲荷大社に持ちこまれたと考えてよいのではないか。実際に稲荷大社には塚が多い。明治四四(一九一一年)、稲荷山御膳谷東側で発見された経塚を始め、上ノ塚、中ノ塚、下ノ塚、荒神塚、命婦塚等々、昭和四十一(一九六六)年の調査では、七七六二基に及んでいる。

これは全部田中社の狐塚でないことは勿論であるが、祭祀遺跡か古墳か尚検討を要する。

田中社が祀られたことにより、全国の狐塚が稲荷社を祀ることになったものか、伏見稲荷大社が田の神の総社であればということでは塚が作られたものか、定かではないが、両者の関係は稲荷明神と狐神の信仰に裏打ちされていることは確認できそうである。

以上

- (1) 神典(大倉精神文化研究所刊)所収
- (2) 笹谷良造著、日本古代の民俗と生活、二〇五頁、一九六二年、東出版KK参照  
「神武天皇は幼名を三毛野入彦と申した。このミケは御饌でその瓊<sup>ニギハヤヒ</sup>稲の魂<sup>ニギハヤヒ</sup>が入ったことを言ったのである。御兄弟の稲日命は、常世の国に行かれたとあるが折口先生は、これは兄弟ではなく、天皇の保持せられた稲霊が体から離れたことを言ったもので、このため熊野の遠延<sup>トコノエ</sup>という受難が起ったとされている」
- (3) 桜井勝之進著、伊勢神宮、七二頁、学生社、一九六九年刊